

拝殿（国宝）

徳川三代将軍徳川家光（1604～1651）は、祖父の陵墓を超えてはならないとの指示を残している。そのため、黒と金を基調とした拝殿は、赤、白、金を基調とした東照宮の拝殿に比べて、比較的落ち着いた色調である。太夫院廟の本殿は、拝殿、合の間、本殿の3つに分かれている。

正面にある三対の銅灯籠は、徳川御三家、尾張家、紀伊家、水戸家から寄贈されたもので、その他の境内の灯籠は、有力な大名が寄贈したものと、1600年半ばに朝鮮の国王が寄贈したものである。

本殿（国宝）

ここには家光の精神が祀られている。東照宮の本殿とは異なり、南向きではなく、中国の地学では権力者の終の棲家として好まれる向きである。家光の祖父である徳川家康（1543～1616）が祀られている東照宮に向かって北東を向いている。家光は、死に際に祖父のそばにいて、来世でも祖父に仕えることができるようにと願ったという。

本殿は金をふんだんに使い、仏壇のような造りになっている。本殿は、四面差し掛け屋根で、仏教寺院建築によく見られる「花頭窓」と呼ばれる曲面の装飾が施されている。